

※ここからは『Z Study 解答用紙編』の国語「評論1 / 古文基礎 / 訓読1」2枚目にご記入ください。

二

【二】 次の(1)～(5)の文の傍線部について、(i)傍線(a)～(c)を現代仮名遣いに直してすべてひらがなで記し、(ii)傍線(d)～(e)の品詞名を記せ。

(各4点)

(1) 桜の <sup>(a)</sup>いみじうおもしろき枝の五尺ばかりなるを、 『枕草子』

(2) 木のまたについて <sup>(b)</sup>みて物見るあり。 『徒然草』

(3) 上人の感涙 <sup>(c)</sup>いたづらになりけり。 『徒然草』

(4) 昔、男 <sup>(d)</sup>ありけり。 『伊勢物語』

(5) 身を知り、世を知れば、願はず、走らず、ただ <sup>(e)</sup>静かなるを望み、 『方丈記』

【二】 次の文章を読み、あとの問に答えよ。

富士川といふは、富士の山より落ちたる水なり。\*その国の人の出でて語る<sup>(a)</sup>やう、「\*一年<sup>(1)</sup>ごろ、物にまかりたりしに、いと暑かりしかば、この水の\*つらに休みつつ見れば、川上の方より黄なるもの流れ来て、物につきてとどまりたるを見れば、\*反故<sup>(2)</sup>なり。取りあげて見れば、黄なる紙に、\*丹<sup>(3)</sup>して濃くうるはしく書かれたり。あやしくて見れば、\*来年なるべき国どもを、除目のごとみな書きて、\*この国来年あくべきにも、守<sup>(4)</sup>なして、また添へて二人をなしたり。あやし、あさましと思ひて、取りあげて、乾<sup>(5)</sup>して、<sup>(b)</sup>をさめたりしを、かへる年の\*司召<sup>(6)</sup>に、この<sup>(3)</sup>文に書かれたりし、一つ<sup>(c)</sup>たがはず、\*この国の守とありしままなるを、三月<sup>(7)</sup>のうちにくくなりて、また<sup>(4)</sup>なりかはりたるも、この傍らに書きつけられたりし人なり。かかることなむありし。<sup>(5)</sup>来年の司召などは、今年この山に、そこばくの神々集まりて、\*なし給ふなりけりと見給へし。<sup>(d)</sup>めづらかなることに候ふ」と語る。

『更級日記』

注 \*その国の人⇨その土地(駿河の国)の人。

\*一年ごろ、物にまかりたりし⇨先年のころ、ある所へ出かけました時に。

\*つらに⇨ほとりで。

\*反故⇨文字などを書いて使用済みになった紙。

\*丹して⇨朱色で。

\*来年なるべき国どもを、除目のごと⇨来年国司が新しく任命される予定の国々について、国司の任官目録のように。

\*この国来年あくべきにも、守なして⇨この駿河の国も来年は国司の任期がきれて、空きができるはずになっているのに対して、(新しい) 国司を任命して。

\*司召⇨役人の任命。

\*この国の守とありしままなるを⇨この駿河の国の国司と書かれていた人がそのとおり任命されたが。

\*なし給ふなりけりと見給へし⇨(任命を) 決めなさるようだと思いました。

問一 傍線(a)と(d)を現代仮名遣いに直して記せ。(各3点)

問二 傍線(1)と(3)の古文での読み方を現代仮名遣いのひらがなで記せ。(各3点)

問三 傍線(4)「なりかはりたる」は「代わってなった」の意味であるが、ここは、(i)誰が、(ii)何になるのかを記せ。ただし(i)は文中から抜き出して記すこと。(各2点)

問四 傍線(5)から名詞をすべて抜き出して記せ。(5点)

問題

二

〔二〕 次の(1)～(5)の文の傍線部について、(i)傍線(a)～(c)を現代仮名遣いに直してすべてひらがなで記し、(ii)傍線(d)(e)の品詞名を記せ。

(各4点)

(1) 桜の (a) いみじう (b) おもしろき枝の五尺ばかりなるを、

『(a) 枕草子』

(2) 木のまたについ (b) ゐて物見るあり。

『(b) 徒然草』

(3) 上人の感涙 (c) いたづらになりけり。

『(c) 徒然草』

(4) 昔、男 (d) ありけり。

『(d) 伊勢物語』

(5) 身を知り、世を知れば、願はず、走らず、ただ (e) 静かなるを望み、

『(e) 方丈記』

二 次の文章を読み、あとの問に答えよ。

富士川といふは、富士の山より落ちたる水なり。\* その国の人の出でて語る<sup>(a)</sup>やう、「一年<sup>(1)</sup>ごろ、物にまかりたりしに、いと暑かりしかば、この水の\* つらに休みつつ見れば、川上の方より黄なるもの流れ来て、物につきてとどまりたるを見れば、\* 反故<sup>(2)</sup>なり。取りあげて見れば、黄なる紙に、\* 丹<sup>(3)</sup>して濃くうるはしく書かれたり。あやしくて見れば、\* 来年なるべき国どもを、除目のごとみな書きて、\* この国来年あくべきにも、守<sup>(4)</sup>なして、また添へて二人をなしたり。あやし、あさましと思ひて、取りあげて、乾<sup>(5)</sup>して、<sup>(b)</sup>をさめたりしを、かへる年の\* 司召<sup>(6)</sup>に、この<sup>(3)</sup>文に書かれたりし、一つ<sup>(c)</sup>たがはず、\* この国の守とありしままなるを、三月<sup>(7)</sup>のうち亡くなりて、また<sup>(4)</sup>なりかはりたるも、この傍らに書きつけられたりし人なり。かかることなむありし。<sup>(5)</sup> 来年の司召などは、今年この山に、そこばくの神々集まりて、\* なし給ふなりけりと見給へし。<sup>(d)</sup> めづらかなることに候ふ」と語る。

『更級日記』

注 \* その国の人 || その土地(駿河の国)の人。

\* 一年ごろ、物にまかりたりしに || 先年のころ、ある所へ出かけました時に。

\* つらに || ほとりで。

\* 反故 || 文字などを書いて使用済みになった紙。

\* 丹して || 朱色で。

\* 来年なるべき国どもを、除目のごと || 来年国司が新しく任命される予定の国々について、国司の任官目録のように。

\* この国来年あくべきにも、守なして || この駿河の国も来年は国司の任期がきれて、空きができるはずになっているのに対しても、(新しい) 国司を任命して。

\* 司召 || 役人の任命。

\* この国の守とありしままなるを || この駿河の国の国司と書かれていた人がそのとおり任命されたが。

\* なし給ふなりけりと見給へし || (任命を) 決めなさるようだと思いました。

問一 傍線(a)~(d)を現代仮名遣いに直して記せ。(各3点)

問二 傍線(1)~(3)の古文での読み方を現代仮名遣いのひらがなで記せ。(各3点)

問三 傍線(4)「なりかはりたる」は〈代わってなった〉の意味であるが、ここは、(i)誰が、(ii)何になるのかを記せ。ただし(i)は文中から抜き出して記すこと。(各2点)

問四 傍線(5)から名詞をすべて抜き出して記せ。(5点)

二

解答

- (i) (a) いみじゅう
- (b) い
- (c) いたすらに
- (d) 動詞
- (e) 形容動詞

解説

- (i) 歴史的仮名遣いの法則について理解できただろうか。
- (a) 「じう」はイ段の音に「う」がついているので「じゅう」に直し、さらに、「ゆ」を拗音の「ゅ」に直す。
- ちなみに、「いみじう」は形容詞「いみじ」の連用形「いみじく」のウ音便(活用形や音便についてはこの先の学習で学ぶので、ここでは、そういうものがあるのだと覚えておいてほしい)。「いみじ」は、(程度が普通でない・はなはだしい)という意味である。よい場合にも悪い場合にも用いられ、その場に合った訳し方をする。ここでは桜が咲いている枝の様子を「いみじうおもしろき」といっているのが、(とても見事な)という意味になる。
- (b) 歴史的仮名遣いでは、ワ行の「い」を「ゐ」、ワ行の「え」を「ゑ」と表記する。現代仮名遣いにはないので、しっかりと覚えておこう。
- 「つゐる」は〈ちょこんと座る〉の意。
- (c) 「づ」は現代仮名遣いでは「ず」と表記する。よって、「いたづらに」は「いたすらに」となる。
- 「いたづらに」は「いたづらなり」という形容動詞の連用形。「いた

づらなり」は〈むだだ〉という意味である。

- (ii) (d) 「あり」は〈存在する〉意の動詞。「あり」の下に付いている「けり」は〈……た……た……ということだ〉という過去の意味を表す助動詞。古文では非常によく出てくるので覚えておこう。
- (e) 「静かなる」は、これだけで文節ができるので自立語である。終止形は「静かなり」で、形容動詞である。

□ 単語

- (1) 桜のとても見事な枝で五尺ほどあるものを、
- (2) 木の二股にちょこんと座って(競馬を)見物する(法師が)いる。
- (3) 上人の感激の涙はむだになってしまった。
- (4) 昔、男がいた。
- (5) 身の程を知り、世間というものを知っている、何も願わないし、あくせくせず、ただ静かであることを望み、

二二

解答

問一 (a) よう (b) おさめたりし (c) たがわず

(d) めずらかなる

問二 (1) じもく (2) かみ (3) ふみ

問三 (i) この傍らに書きつけられたりし人

(ii) 駿河の国の国司

問四 来年・司召・今年・山・神々

解説

問一 (a) 「やう」は、ア段の音に「う」がついているので「よう」に直す。  
(b) 現代仮名遣いでは、ワ行の「を」は助詞以外には用いない。「を」をア行の「お」に直せばよい。

(c) 語頭以外の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は「わ・い・う・え・お」となる。「は」を「わ」に直せばよい。

(d) 原則として、ダ行の「ぢ・づ」は「じ・ず」に直す。「づ」を「ず」に直せばよい。現代仮名遣いで「づ」と表記するのは、「つづく(続く)」「つづみ(鼓)」「きづく(気付く)」などのきまった言葉だけである。

問二 どれも古文特有の読み方を持つ語だが、意味も覚えておきたい。

(1)「じもく」。歴史的仮名遣いだと「ぢもく」。〈役人を任命する儀式・役人を任命する人事異動目録〉の意味。ここは、「目録」の方である。  
(2)「かみ」と読み、〈国司〉の意味である。平安時代の国司は、都から派遣され、おおむね任期は四年であった。国司候補の貴族たちは、次の年に新しい国司が任命される予定の国を「あくべき国(＝空きが

できるはずの国)」とし、自らの任命を心待ちにしたのである。

(3)「ふみ」と読む。古語辞典を引いてみると、①手紙、②書物、③漢詩、④学問等の意味が載っているが、ここは、川上から流れ着いた紙(反故)を指している。

問三 文中の次の二箇所注目しよう。

問題文のここを見よう!!

・守なして、また添へて二人をなしたり。(7行目)  
……新任の国司を任命して、また書き加えて二名を国司に任命している。

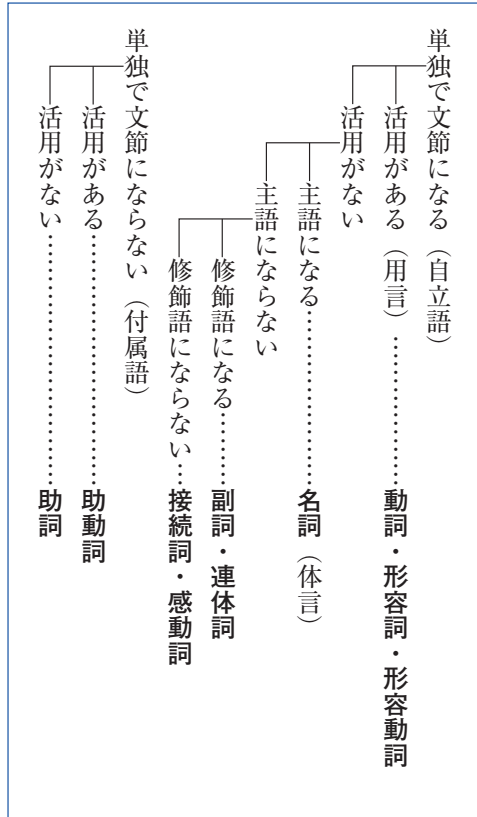
・この国の守とありしままなるを、三月のうちに亡くなりて、またなりかはりたるも、この傍らに書きつけられたりし人なり。(10～11行目)

……この駿河の国の国司と書かれていた人がそのとおり任命されたが、その人が三カ月のうちに亡くなって、また次に代わってなった人も、その横に書き添えられていた人である。

つまり、駿河の国の国司として新しく任命された人が、三カ月で亡くなり、国司として名前が書かれていた二人のうちのもう一人の人が代わって国司になったというのである。

(i)は、文中から抜き出して答えるので、傍線(4)の直後の「この傍らに書きつけられたりし人」となる。(ii)は、「駿河の国の国司」である。

問四 現代語でもおなじみの名詞が多いので、選びやすかっただろう。品詞の分類を、あらためて確認しておこう。



傍線部のうち、単独で文節になり、活用がなく、主語になることができるのは、「来年」「司召」「今年」「山」「神々」の五語である。

口語訳

富士川というのは、富士山から流れ落ちてくる川である。その土地(駿河の国)の人が出てきて語ることには、「先年のころ、ある所へ出かけました時に、たいそう暑かったので、この川のほとりで休みながら見てみると、川の上流の方から黄色いものが流れてきて、何かにひっかかって止まったのを見ると、書き損じの紙である。(それを)取り上げて見ると、黄色い紙に、朱色で濃くきちんと(字が)書かれていた。不思議に思ってみると、来年国司が新しく任命される予定の国々について、国司の任官目録のようにすべて書いてあって、この駿河の国も来年は国司の任期がきて空きができるはずになっているのに対して、(新しい)国司を任命して、また書き加えて二名を国司に任命している。不思議だ、驚きあきれられるばかりだと思って、(それを)拾って、乾かして、しまっておいたが、翌年の役人の任命には、この紙に書かれていたことが、ひとつも間違いなく、この駿河の国の国司と書かれていた人がそのとおり任命されたが、(その人が)三ヶ月のうちに亡くなって、また次に代わって(国司に)なった人も、その横に書き添えられていた人である。このようなことがあった。来年の役人の任命などは、今年この(富士)山に、多くの神々が集まって、決めなされるようだと思っておりました。珍しいことでもあります」と語る。

語句チェック

物……対象をはっきりとさせずに漠然といったもの。  
 あやし……①神秘的だ、②異常だ・不思議だ、③奇妙だ。